令和７年度青森県伝統工芸士認定者の概要

塩谷（しおや） 一真（かずま） 氏（27 歳）　《太鼓（たいこ）》　弘前市

・家業を継ぐため１５歳で父の仕事を手伝い始め、４代目として日々技術を磨いている。従事年数は１２年。
・ねぷた団体や県外の和太鼓演奏者など、顧客の求める音を出すため、熟練の技術で皮の部位や厚さを調整するほか、県内外の祭りに赴き音色を確認・研究している。
・職業体験に訪れる小中学生に対し、太鼓の歴史や製造工程を教えるなど、文化の伝承と後継者育成に貢献している。

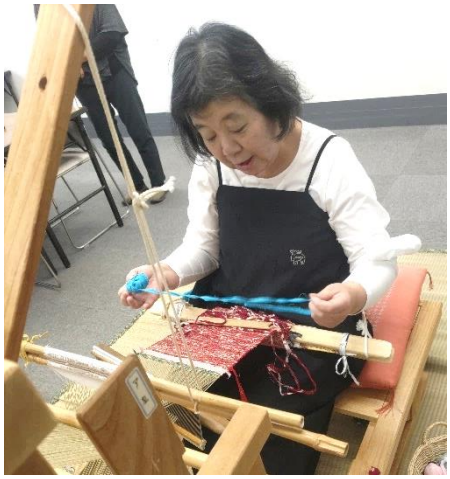
長谷川（はせがわ） 優志（まさし） 氏（46 歳）　《弘前（ひろさき）こけし・木地玩具（きじがんぐ）》　弘前市

・伝統工芸士である父に２５歳で弟子入りし、津軽藩ねぷた村及び津軽こけし館にて、こけし・木地玩具の製造に従事。従事年数は２２年。
・伝統的な津軽系こけしのほか、精密な独楽の製造を得意とし、昔ながらの独楽を改良して遊びやすく美しい製品を開発・販売。
・木地玩具を高齢者に手に取ってもらい、遊び方を孫やこどもたちに教えて自慢してほしいという想いで日々製造に携わっており、伝統工芸の普及や文化継承に貢献している。

岩淵（いわぶち） 洋子（ようこ） 氏（70 歳）　《南部裂織（なんぶさきおり）》　八戸市

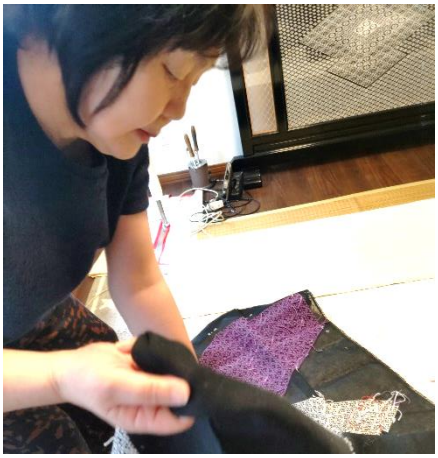
・平成１７年に受講した市民学校裂織教室で南部裂織工房「澄」の創設者 井上澄子氏に師事。平成２２年には講師として認定される。従事年数は２０年。
・高度な裂織技術と縫製技術を有し、南部裂織を多くの人に着用してほしいとの願いから、ベストやコートなど服飾製品の製造も行う。
・井上氏の古布を大切に最後まで使い切るという精神を引き継ぎ、はっちの工房での体験や土産物の開発・販売に取り組み、伝統工芸の普及や後継者育成に貢献している。

工藤（くどう） 久美子（くみこ） 氏（70 歳）　《南部裂織（なんぶさきおり）》　八戸市



・知り合いから古い地機を見せてもらい感銘を受けたのが南部裂織との出会い。平成６年に千田セイ子氏に師事し、技術を磨く。従事年数は３１年。
・あじろ織やつづれ織など多様な技法を習得し、自ら柿渋で染めた古布を使ったバッグやストール、シードルの瓶を入れるためのりんごをイメージしたバッグなど、次々と浮かぶアイデアを実現させている。
・「八戸さき織の会」が主催する南部裂織教室で講師を務め、生徒に対して丁寧に指導を行うなど、技術の伝承と後継者育成に貢献している。

西野（にしの） 美波（みなみ） 氏（70 歳）　《南部菱刺し（なんぶひしざ）》　八戸市



・南部菱刺しの復興と普及に尽力した西野こよ氏に昭和５５年から師事。和裁と菱刺しを習いながらこよ氏の普及活動を支えてきた。従事年数は４５年。
・伝統的な梅の花、きじの足などの模様を作るものに合わせて選び、一針一針丁寧に縫うことでふっくら仕上げるという技法を継承。
・南部菱刺しの裾野を広げるため、八戸市内の複数の公民館で講師を務めるほか、西野刺っ娘の会会長として会員への技術指導を行うなど、伝統工芸の普及や後継者育成に貢献している。

（参考）

○「太鼓（たいこ）」の概要

太鼓は津軽地方の祭りであるねぷたには欠かせないものであり、藩政時代から現在まで受け継がれてきた。津軽の太鼓は弘前の工芸品である桶を用い、胴に馬や牛の皮張りをして作られる。

太鼓の生命ともいうべき皮の部分は、毛の処理・なめし・乾燥・皮張りと全工程手作業で行われている。特に厚さ２ミリメートルに皮を削る作業は伝統の手技である。

現在は青森の短い夏に迫力を添えるばかりでなく、楽器や神事用として広く全国各地に出荷されている。

【主な製造工程】原皮塩抜→原皮の油及び肉の除去→原皮毛抜→皮の乾燥→皮の削り→皮張り→皮縁塗装→桶胴塗→ひも染→組立→完成

【主な製品】桶太鼓・長胴太鼓・附締太鼓

○「弘前（ひろさき）こけし・木地玩具（きじがんぐ）」の概要

東北地方の工芸品である伝統こけしは１１系統に分類される。その中の一つ、津軽系こけしは、主に１本の木から作られる“作りつけ”という技法で作られ、髪型はオカッパ頭という特徴を持ち、黒石市、大鰐町、弘前市で作られるこけしの総称である。

明治時代から津軽地方内の木地師及び津軽と他県の木地師との交流が盛んに行われる中で、弘前こけしは津軽系こけしの中でも大鰐系の流れをくむものとして現在まで受け継がれている。

またこの地域ではこけし作りとともにこまやダルマなどの木地玩具も盛んに作られ、地域の人々に愛されている。

【主な製造工程】木地挽き→ロクロ線入れ→模様付け→顔描き→ロウ挽き→完成

【主な製品】こけし・こま・ダルマ

○「南部裂織（なんぶさきおり）」の概要

江戸時代に着古した着物や布を再生する機織りの一技法として生み出された織物である。当時は、寒冷な気候のために綿の栽培は難しく、北前船で運ばれた木綿や古手木綿はとても貴重な存在であった。そのため、厳しい生活を強いられた農村地方の女性たちが布を大切にするための知恵から生まれたものである。

細く裂いた布を横糸に、木綿糸を縦糸にして地機で織った裂織は丈夫で暖かく、そのカラフルな色移りと複雑な機上げが特徴である。

主としてこたつ掛けや帯などに用いられてきたが、現在ではテーブルカバーをはじめ現代感覚の手織物にも応用されている。

【主な製造工程】整経→筬（おさ）通し→男巻き（おまき）→綾越し→
綜絃（そうこう）通し→元寄せ→機上げ→製織→完成

【主な製品】卓布・手提げ袋・こたつ掛け

○「南部菱刺し（なんぶひしざ）」の概要

江戸時代、八戸を中心とする南部地方で南部菱刺しが生み出された。当時の農民たちは麻の着物しか着ることが許されておらず、木綿は糸として使用するものと決められていた。そこで農村の女性たちは補強と保温のために麻に木綿糸を刺して、厳しい北国の生活をしのいできた。この技術が現在まで受け継がれている。

菱刺しの特徴は麻布に綿糸で偶数目を拾って織り成されるウメノハナ・キジノアシなどの横に長い菱型の多彩な幾何学模様である。

現在では麻地以外に木綿地やウール地も用いられ、ネクタイやタペストリーなど新たな製品にもその技術は応用されている。

【主な製造工程】麻地の地直し→紋様のデザイン→刺し→仕上げ→完成

【主な製品】卓布・前垂れ・のれん・バッグ